「青と緑のサリエル」
——取扱説明書——

小澤 とも

正直に申し上げます。作品を書くにあたって、構成らしい構成を組んだことはありません。自分自身のなかで見えてくる世界を、単に言語化しているだけです。

文芸に足を踏み入れたばかりのころは、構成をしっかり組まないスタイルは御法度だと考えていました。作品のねらいを明示したり、作品の構造を緻密に組んだ上で、創作にのぞまなければならないと思っていました。ところが、構成を紙上に書き下ろすたびに、創作意欲が減退するという現象に見舞われました。

しばらく文芸（書くことも、読むことも）から遠ざかり、創作することに見切りをつけようとさえしました。構成を具体的にアタマで組めない限り、日の目をみることはないと思ったからです。それが、私がもつ能力の限界かな、とも思いました。

それでも、私らしい方法があるかもしれない、と、日々模索していました。創作活動からすっぱりと足を洗ったとして、私に何が残るのか？　作品を書かない自分は何なのか？　そもそも、作品を創出する意味は？　など、人生哲学に近いレベルまで、模索を続けました。自分自身の生い立ちについても、振り返りました。

ナントナクの流れで、芸術学に触れました。文芸は、たまたま国語にカテゴライズされているだけで、本来は芸術の一部だったのではないか？　と、日本美術や西洋美術を学ぶうちに考えるようになりました。いわば、油絵や水墨画と同じ、自分の内面にある世界を表現する手法に文章を使うだけで、やっぱり、文芸は芸術の一部だと、断定するにいたりました。卒業研究に着手する前に、たまたま文芸への道が開かれ、在籍した大学でコースを変更することができたのです。

そういった経緯で書き上げたのが、【青と緑のサリエル】でした。

この作品について、あえて語るべきことは、私がこの世の中のあり方に対して、ある種の絶望を感じていたという事実です。文芸を、作家を志望するひとの大半は、過去の作品を大量に読み、それを血や肉にすることが、自身の文芸を豊穣にする唯一の方法だと信じていることでしょう。確かに、それも一手法であることは認めます。ですが、私たちが生きる世界は「過去」ではなく「現在」または「未来」です。現在には、現在の社会が包含する問題が存在します。過去には過去の、その時点で重要だった社会的事象や思想が無意識のうちに表出していることでしょう。私たちが未来に向かって現在に生き、現在の社会に接して暮らしてるからには、視線は「現在」に重きをおくべきでしょう。そうでなければ、自分が創り出す作品は「過去」のトレースになるだけです。

それゆえに、私が【青と緑のサリエル】において、試みたことは、世界の再構成だったと言えましょう。理想の世の中を作るためには、世界を一度壊さなければならなかった、と。ですが、この理由は「後付け」のものになります。書きながら、自分自身に問いかけて、理由を見つけた次第です。私のなかにある現実ではない「他の世界」は、なぜ出来上がるのか？　ただ、その問いを探す旅にでていた、と。

今回、【造藝】に卒業制作（論文ですか？）を掲載していただけることになり、あわせて他の作品も掲載していただけるとのことで、一つの作品【つながっている世界】を書き下ろしました。この作品は、私の中にある世界のいくつかを、オムニバス形式（と言っていいのかはナゾですが）で書き表してみました。結果として、それらの世界が一つに繋がったというだけで、アタマで考えてムリに繋げたわけではありません。勝手にそうなっただけです。

おそらく、それぞれの章の作品は、もっと長く、もっと深く広がることでしょう。ある著名な小説ががおっしゃっていたそうですが、中編作品は長編を書く前段階だ、と。私にとっても、まさにその通りです。いずれ長い作品になることでしょう。

私が、私だけが見ている「別の世界」を、世の中に生み出せるように、人々に読み聞かせることができるように、研鑽する毎日はこれからも続きます。あるべき場所を目指して、前へ、上へ、進みます。

また、どこかでお会いしましょう！